

博士論文要約
『東京大空襲の集合的記憶に関する社会学的研究』

木村 豊

1. 目次

序章 問題の所在	4章 東京大空襲死者の記録と記憶
1章 先行研究と本研究の立場	1 空襲死者を記録する市民運動
1 広島・長崎被爆者調査の検討	2 〈二人称の死〉を語る遺族
2 戦争の記憶と記憶の社会学	3 〈三人称の死〉を語る体験者
3 集合的記憶のフィールドワーク	4 小括
4 小括	5章 ある家族の東京大空襲の記憶
2章 東京大空襲体験の記録と記憶	1 空襲を経験した家族の調査
1 空襲体験を記録する市民運動	2 各家族の東京大空襲の語り
2 体験の中の〈過去〉と〈現在〉	3 小括
3 体験を書くことをめぐる力学	6章 東京大空襲の記憶と痕跡
4 小括	1 東京大空襲の後／跡を歩く
3章 東京大空襲死者の祈りと記憶	2 歴史展示の中の空襲の記憶
1 公園に集められる遺骨と名前	3 仮埋葬地の写真という実践
2 地域に散在するモニュメント	4 小括
3 多重の死者供養と遺族の実践	終章 東京大空襲の集合的記憶
4 小括	

2. 研究目的

本研究は、戦時中 1945 年 3 月 10 日に米軍によって行われた東京大空襲の記憶が、現在の日本社会の中で、いかに表象されており、いかに想起されているのか、について記述分析することを目的としている。

これまで、東京大空襲に関する学術的な調査研究はほとんど行われておらず、そのため、戦後日本社会の中で東京大空襲については、「戦時中東京は、1945 年 3 月 10 日の大空襲を中心として 100 回を超える空襲を受け、罹災者約 270 万人、死者約 10 万人の被害を出した」というような被害の概要が繰り返し語られてきた。そうした状況に対して、東京大空襲の記録化はその当事者によって進められてきた。1970 年代には東京大空襲の体験を記録する市民運動が進められており、1990 年代には東京大空襲死者の氏名を記録する市民運動が進められている。

そうして戦後日本社会の中で、東京大空襲とはいかなるものであったのかという問題は、その当事者によって明らかにされてきた。そこには、東京大空襲の記憶の実践を見ることができると。つまり、大空襲の当事者は、戦後生活の中で自らが被災した東京大空襲の記憶と向き合う中で、ある人は自らの大空襲の体験を書き記し、ある人は大空襲で亡くなった家族を供養し、ある人は大空襲に関する市民運動に参加したりするなど、そうした大空襲に関わる社会的な行為を行っており、そうした行為を通して大空襲の記憶を想起している。本研究が対象としているのは、そうした戦後日本社会における東京大空襲の記憶との向き合い方である。

3. 各章要約

(1) 先行研究と本研究の立場

1 章では、東京大空襲の集合的記憶について記述分析するための枠組みについて検討した。社会学の枠組みを用いて、いかに東京大空襲を論じることができるのか？本研究の位置づけについて、先行研究の検討・理論的枠組の検討・調査手法の検討という視点から定めるため、(1) 広島・長崎被爆者調査の検討、(2) 戦争の記憶と記憶の社会学、(3) 集合的記憶のフィールドワークの 3 点について検討した。

まず、戦争災害に関する先行研究として、社会学の中で行われた被爆者調査について検討した。戦後 70 年という年月の中で、数多くの社会学的な被爆者調査が行われており、そこでは社会学における様々な視点から被爆者に対する調査が行われてきたが、その多くは社会学の歴史の中に埋もれており、近年ではほとんど取り上げられることはなくなっている。そうした被爆者調査の中で調査者は、原爆の生者と死者に対して、個別化に向かう方向と一般化に向かう方向の間に立たされることとなる。つまりここでは、社会学の枠組みに基づいて原爆の被爆者・被爆死者を一般化して捉えようとする方向と、調査の中で出会ったひとりひとりの原爆の被爆者・被爆死者の個別化に向かう方向との間に立たされることとなる。

そのため、被爆者調査の中ではしばしば、既存の社会学の枠組みでは捉えることのできない被爆者と出会った社会学者のとまどいや、そうした被爆者を既存の社会学の枠組みにもとづいて記述することのためらいが記されており、そこには、被爆者との距離の取りづらさを見ることができると。つまり、そこでは調査者が、被爆者をその外側に立って観察することも出来ないが、被爆者と同じ立場に立つ事も出来ないというような調査の困難を抱えており、それは社会学によって原爆を捉えることの難しさとなっている。そしてそれは、それまでの社会を解体す

るような戦争災害を捉えようとするときに共通して立ち現れる問題であると考えられる。そこで本研究では、そのような被爆者調査の歴史をもとに、東京大空襲の生者と死者に対して、そうした個別化と一般化に向かう方向を内包するように検討することを目的としている。

社会学における集合的記憶論は、そのような観点から東京大空襲について記述分析するための一つの枠組みとなる。集合的記憶研究は、記憶の社会的側面について検討するものであるが、それは記憶をめぐる個人と社会的集団との関係に注目するものであり、そのため、ある過去の出来事の記憶を想起しようとするとき、個人は集団の成員としてその記憶を想起すると考えられる。特に、近代社会における集合的記憶は、その複数性によって特徴づけることができる。つまり、近代社会においてある過去の出来事は複数の集団によって表象されており、人びとは、そうした複数の集団との関係の中で過去の出来事を想起していると考えられる。集合的記憶は、そうした個人と複数の社会的集団との関係の中で成立するものとして捉えられる。

そうした集合的記憶の枠組みに基づきながら過去の出来事の記憶について調査しようとするとき、その過去の出来事の記憶を表象する集団の自律性に注目する集合主義的アプローチと、集団の枠組みに基づき過去の出来事の記憶を想起する個人の自律性に注目する個人主義的アプローチとの間に立たされることとなる。そこで、そうした二つの立場を内包するように集合的記憶における個人と社会的集団との関係を捉えるため、本研究では、社会学において個人と社会的集団の関係について記述分析する方法として、ライフヒストリー調査とライフストーリー調査という二つの手法を横断的に用いた調査を行っている。

ライフヒストリー調査では、現在の個人を形成しているものとして過去の経験を見ており、それに対して、ライフストーリー調査では、現在の認識によって形成されているものとしての過去の経験を見ている。そのため、ライフヒストリーの中には、個人の人生の移り変わりの中で、個人と社会的集団との関係がつくられていくプロセスを見ることができるが、それに対して、ライフストーリーの中には、現在において過去の経験を語るときに成立する個人と社会的集団との関係を見ることができる。現在の個人を形成している原因を理解しようとするために、「なぜ」を問うライフヒストリー調査と、現在の個人の解釈を理解しようとするために、「いかに」を問うライフストーリー調査は、これまで対立的なものとして捉えられてきたが、そうした二つのレンズを取り込むことで、相補的なものとして用いることができる。

そこで本研究では、そうした二つの手法を横断的に用いて集合的記憶について調査するため、過去の出来事の記憶を想起する人びとに対して、二つの問いをもって調査を進めた。それは、なぜある特定の社会的集団との関係で過去の出来事の記憶と向き合うようになったのかという問いと、その社会的集団が表象する記憶の社会的枠組みを用いることによっていかに過去の出来事を想起しているのかという問いである。それによって本研究では、東京大空襲の集合的記憶について、ある特定の社会的集団との関係の中で東京大空襲の記憶と向き合っていく過程について検討すると共に、そうした社会的集団が表象する記憶の社会的枠組みを用いて想起されている大空襲の記憶について検討した。そしてそれらを統合することで、本研究では、日本社会は東京大空襲の記憶といかに向き合ってきた／いるのかについて記述分析した。

(2) 東京大空襲体験の記録と記憶

2章では、1970年代に「東京空襲を記録する会」が進めた『東京大空襲・戦災誌』の編纂事

業を取り上げ、そうした空襲体験を記録する市民運動の中で、東京大空襲の集合的記憶がいかに成立しているのかについて検討した。東京大空襲の体験の記録化が本格的に進められるようになったのは、大空襲から25年以上が経過した1970年代になってからであった。大空襲の当事者を中心として「東京空襲を記録する会」が立ち上がり、東京空襲の体験記の募集が進められ、『東京大空襲・戦災誌』が刊行されている。

それは、東京大空襲から25年近く経過し大空襲によって壊滅的な被害を被った地域も再建・開発が進む中であって、大空襲に関することがメディアなどでもほとんど報じられておらず、また大空襲に関する歴史についてまとめた資料もほとんど存在しないことにもとづくものであった。そこで、大空襲の当事者が中心となって、「記録する会」が立ち上がり、「市民のみた空襲戦災史」をつくる事業が進められた。そこでは、大空襲の当事者によって書き記された東京大空襲の体験記録の収集が進められたが、それは、戦後日本社会の中で東京大空襲の体験とはいかなるものであったのかという問いに対して、一つの枠組みを提示するものとなった。その中では、空襲の体験を書く上での「ポイント」として、「戦災の日のこと」「どう逃げたか」について詳しく書くことが示されており、それは、『戦災誌』の中に記される空襲の体験を枠づけるものとなり、それは特に、炎の中を逃げ回ったというような大空襲の体験のイメージをかたちづくるものとなっていった。

そのため、そうした空襲体験記の募集に自らの空襲の体験を応募しようとするとき、どのような体験者が「本当の空襲体験者」であるのかといったことや、そうした体験者によってどのような空襲体験が書かれるべきかといったことが問われることとなり、それらは空襲の体験を書くときの規範となっている。また、そうした『戦災誌』の中では、東京大空襲の当事者によって、東京大空襲を被災した日のこととともに、そうした東京大空襲の経験を書いている現在のことが記されていた。とりわけ、空襲の体験を書く上での「ポイント」には、東京大空襲の日のことを書くことが示されているが、投稿された体験記の多くには、現在のことが書き記されているのを見ることができる。したがって、『戦災誌』の中に収められた体験記は、空襲の体験を「過去」のものとする力と「現在」のものとする力の拮抗の中で成立していると考えられる。つまり、「戦災の日」「どう逃げたか」を書こうとするのは空襲の体験を「過去」のものとする方向に向かうが、そうした空襲の体験がそれを書いている「現在」の生活を規定しているとき、それは空襲の体験を「現在」のものとする方向に向かうこととなると言える。

また、空襲の体験を書くということは、空襲の体験がある社会的集団の中で公的に価値づけられていくことを意味しているが、空襲被災者の多くは家族と共に空襲を経験しているため、空襲の体験は家族を基盤として成立している。そのため、空襲の体験記は、自らの空襲の体験を公的なものにすることが求められる力と、自らの空襲の体験を私的なものとしてとどめておこうとする力との拮抗の中で成立することとなる。そうして、空襲の体験を書き記しそれを公にするということは、その体験を公に発表することを手助けする社会的集団と空襲を共に体験した家族という、複数の社会的集団との関係の中で成立している。そのため、体験者は、そうした空襲を公に発表することをめぐる異なる集団間の「葛藤」の中で自らの空襲体験を書き記している。そして、そうした複数の社会的集団との関係の中で空襲の体験を書くということを通して、体験者は、自らの空襲体験を想起していると考えられる。

(3) 東京大空襲死者の祈りと記憶

3章では、東京大空襲死者が供養される場とそこにお参りする遺族について取り上げ、そうした死者に対する祈りを通して東京大空襲の集合的記憶がいかにかに成立しているのかについて検討した。東京大空襲の死者は、「家」の墓、地域のモニュメント、東京都の公的な慰霊・追悼施設という複数の場所で複数の集団によって供養されており、遺族はその複数の場所にお参りすることによって大空襲で亡くなった家族を供養している。そこには、東京大空襲死者の多重的な供養のあり方を見ることができる。

まず、東京都によって横網町公園において東京大空襲の死者に対する公的な慰霊・追悼施設がつけられていく中で、その死者が「ふつうではない死」として位置づけられていった。それは、1950年代になってそれまで都内各地に仮埋葬されていた身元不明の空襲死者の遺骨をめぐって成立したものであるが、その後2000年代には都内の空襲死者の氏名が記された名簿が納められるようになり、そこでは、空襲死者の遺骨と名前を軸として東京都における空襲の死者に対する供養の場が成立していった。それとともに、1940年代には、「不慮の事変災害」の「犠牲」や「災変」の「遭難者」と記されていたのが、その後「戦災」の「遭難者」と記されるようになり、2000年代には「空襲」の「犠牲者」と記されるようになっていった。そこでは東京の空襲死者が集められ、空襲による「遭難者」「犠牲者」という「ふつうではない」死として位置づけられることで、その集合的な死者が供養されている。それは東京都によってつくられた東京の空襲死者に対する供養の場となっている。

また、東京大空襲の被災地域には、各社会的集団によって大空襲の死者に対するモニュメントが建立されており、その中で、空襲の死者が「ふつうではない死」として位置づけられていった。そうしたモニュメントの多くには、空襲死者の遺骨も名前も納められていないが、そこでは空襲によって亡くなった集団内の成員を供養するための供養の場が成立していった。また、そこには東京大空襲の死者を供養するモニュメントの広がりを見ることができる。東京大空襲のモニュメントの中心にあるのは、ある一つの集団において大空襲の中で亡くなった同じ集団内の死者を供養するためのものであるが、それが複数の集団の合同でそれらの集団内の空襲死者を供養するためのものや、それらの集団のある地域で亡くなった無縁の空襲死者を供養するためのものなどへと広がっていった。そうして地域のモニュメントは、被災地域の各社会的集団と空襲死者との関係を軸に成立しており、そこでは地域の空襲死者が集められ、地域の空襲による「殉難者」「犠牲者」という「ふつうではない」死として位置づけられることでその集合的な死者が供養されている。それは東京大空襲の被災地域の各社会的集団によってつくられた空襲死者に対する供養の場となっている。

そうして東京大空襲死者の多重的供養がつけられていく中で個々の空襲死者は、一方で、社会的な集団の中で「ふつうではない死」として位置づけられていったが、他方で、「家」の墓では、「ふつうの死」として位置づけられていった。そして遺族は、東京大空襲で亡くなった家族に対して、東京都の横網町公園や地域のモニュメントにお参りするとともに「家」の墓にお参りしていた。そこでは、「ふつうの死」／「ふつうではない死」という空襲の死者に対する異なる位置づけの間で空襲で亡くなった家族を供養する遺族を見ることができる。つまり、多重的供養の中で大空襲の死者は、「家」・地域集団・東京都という複数の集団によって祀られており、地域集団や東京都では「ふつうではない」死者として供養され、「家」では「ふつう」の死者と

同じように供養されており、遺族は、そうした複数の場所にお参りしている。その際遺族は、複数の集団によって示される「ふつうの死」・「ふつうではない死」という二つの位置づけの間で「葛藤」しながらも、それらを両立させることによって空襲で亡くなった家族を供養しその死者を想起していると考えられる。

(4) 東京大空襲死者の記録と記憶

4章では、1990年代に「東京大空襲犠牲者氏名を記録する・墨田センター」が進めた東京大空襲死者の氏名を記録する市民運動を取り上げ、そうした空襲死者を記録する市民運動の中で、東京大空襲の集合的記憶がいかにか成り立っているのかについて検討してきた。東京大空襲死者の記録化が本格的に進められるようになったのは、大空襲から50年以上が経過した1990年代になってからであった。大空襲の当事者が中心となって「東京大空襲犠牲者氏名を記録する・墨田センター」が立ち上がり、10万人と言われる大空襲死者のひとりひとりの氏名を記録する運動が進められ、「東京大空襲犠牲者名簿」がつくられている。

それは、東京大空襲から50年が経過し、大空襲の死者に対して五十回忌法要が行われ、その個別の死者に対する供養にある区切りがつけられる中であって、大空襲の死者は10万人という数字で表されており、そのひとりひとりの個別の記録が残されていないということにもとづくものであった。そこで、大空襲の当事者が中心となって、「墨田センター」が立ち上がり、墨田区・東京都に対して空襲死者の氏名を記録することを求める運動が進められた。そこでは、独自に空襲の死者の氏名を記録する運動が進められたが、それは、戦後日本社会の中で10万人と表されてきた東京大空襲の死者とはいかなるものであったのかという問いに対して、一つの枠組みを提示するものとなった。

そうした氏名記録運動の中では、空襲の死者について想起する／語る二つの立場がある。一つは、空襲によって家族を亡くした遺族という立場であり、もう一つは、空襲を直接体験した体験者という立場であるが、この運動の中でそうした二つの立場は、空襲の死者に想起する／語る明確な立場となっている。氏名記録運動では、それらの二つの立場から、大空襲の死者が想起され／語られているが、その手助けとなるのが、「せめて名前だけでも」という運動のスローガンであり、それはこの運動の中で、大空襲の死者を想起する／語るための社会的な枠組みとなっている。氏名記録運動の中で、空襲の死者は、このスローガンを通して表象されており、遺族や体験者は、このスローガンを通して空襲の死者を語り／想起している。

遺族から寄せられた手記『声』の中では、空襲によって家族を亡くした遺族という立場から、〈二人称の死〉が語られていたが、そこでは、空襲で亡くなった家族の遺体や遺骨を見ることができなかったことが語られていた。そのため、遺族による〈二人称の死〉の語りの中で、「せめて名前だけでも」という語りは、家族において死を見る／認めることの不十分さを意味している。したがって、空襲で亡くなった家族の名前が記録され、「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」内に収められている「東京空襲犠牲者名簿」の中に記されるということは、遺族にとって、見ることができなかった遺体や遺骨の代わりになるものとなると考えられる。また、氏名記録運動を中心となって進めてきた団体の代表者が語る東京大空襲の体験の中では、空襲を直接体験した体験者という立場から〈三人称の死〉が語られていたが、そこでは、名前も分からない大量の遺体を見たことが語られていた。そのため、体験者による〈三人称の死〉の語

りの中で、「せめて名前だけでも」という語りは、自分が空襲の直後大量の遺体を確かに見たにもかかわらず、それを現在に表す記録の不十分さを意味している。したがって、東京空襲死者の氏名を記録するという事は、体験者にとって、自分が確かに見た大量の遺体の「真実」を現在に表すための遺体の代わりになるものとなると考えられる。

そうした二つの立場が共存する場を可能にしているのが、「せめて名前だけでも」というスローガンであった。氏名記録運動の中では、このスローガンを通して、遺族・体験者という立場と東京空襲の死者との関係性が語られており、それは東京空襲の死者を想起する枠組みとなっている。ただ、二つの立場によってこのスローガンが表わすものは異なっている。遺族にとって、空襲で亡くなった家族の遺体や遺骨を「見るができなかった」ということは、家族の中で身近な人の死（二人称の死）を見る／認めるという死者と遺族との関係性において不十分なものであった。また、体験者にとって、東京空襲の死者を表す記録がないということは、自分が空襲の中で偶然生き残り、大量の遺体（三人称の死）を確かに「見た」という関係性において不十分なものであった。そうしたスローガンを通して語られる不十分さの訴えは、氏名の記録へと向かう原動力となっている。つまり、10万人といわれる東京空襲死者のひとりひとりの氏名を記録することは、それら二つの立場から語られる不十分さを補おうとするものであると言える。そこでは、遺族と体験者が、「せめて名前だけでも」という空襲死者の記憶の社会的枠組みを二つの立場で共有することによって、空襲の死者を想起しているとともに、その記憶の社会的枠組みが、氏名記録運動を支えるものとなっていると考えられる。

（5）ある家族の東京大空襲の記憶

5章では、東京大空襲を被災したある一つの家族（5人の姉妹）へのインタビュー調査を取り上げ、その家族の中で東京大空襲の集合的記憶がいかにか成り立っているのかについて検討してきた。東京大空襲は、生活空間が被災の場となったため、家族で大空襲の中を逃げまわった体験者が多く、また、大空襲によって家族を亡くした戦災遺族も多い。したがって、東京大空襲において家族は重要な経験の基盤となっており、そこでは体験者・遺族という空襲に対する二つの関わり方が複雑に重なり合っている。

そのため、東京大空襲を被災した家族は、体験者／遺族という空襲に対する二つの関わり方の重なりの中で、さまざまな経験を有している、と同時に、そうした空襲の経験を公に書こう／語ろうとするとき、二つの関わり方のあいだで空襲の経験を書く／語ることの困難さを抱えている。それは、空襲の経験を公に語ろう／書こうとするとき、そこにはある（社会的コンテキスト）が配置されているためである。つまり、そこでは、何が（社会的な）経験として語られるべきかという問いと、そうした経験を語ることでできる理想的な当事者とは誰かという問いがいやおうなく入り込んでいる。したがって、本章で示した家族の中でも、遺族会やテレビ局の取材において家族が大空襲の経験を語った／語らなかったとき、そこには、その場に応じた、何が空襲の経験として語られるべきかという問いと、そこで生じる大空襲のイメージ（例えば、「炎の中を逃げまわった」というようなイメージ）、また、そうした経験を語ることでできる大空襲の当事者とは誰かという問いと、そこで生じる大空襲の経験を語る規範（例えば、体験時の年齢が上がるほどよく分っているという判断）が入り込んでいたと考えられる。

そうした（社会的コンテキスト）の中で、大空襲の経験を聞き取ろう／語ろうとするとき、

そこでは、聞き手と語り手との間で理想的な大空襲の当事者像が想起されており、さらにそこでは、具体的な当事者が想起されているわけではなく、抽象的な大空襲イメージに合致するような大空襲の経験を語る事ができる当事者像が想起されている。そのため、そうした場においては、聞き手と語り手との間で大空襲の経験を語ることに對する認識の齟齬が生じたり、また、語り手は、空襲を語る資格があるかどうかといったことが問われてしまう。そして、そうした〈社会的コンテクスト〉を完全に除外することはできない。そこで本研究では、そうした〈社会的コンテクスト〉を相対化し、体験者／遺族という空襲に対する二つの関わり方を内包しながら家族における東京大空襲の記憶を捉えるため、大空襲を経験したある一つの家族の各人に対して、「あなたにとって、東京大空襲がどのようなものであったのか／あるのか」という問いをもってインタビューを行い、そして語られた各々のライフヒストリーにおける大空襲の経験を重ね合わせることによって、家族における大空襲の記憶の一端を示してきた。

そうした調査によって、まず、この家族の各人にとっての東京大空襲の経験について見ることができた。つまり、家族の各人によって、体験者／遺族という大空襲に対する二つ関わり方（当事者性）の重なりの中で、また、人生（ライフヒストリー）における大空襲経験の位置づけの中で、そして、家族関係の中で、各々の大空襲経験を語る立場がつくられており、そうした立場から各々の大空襲経験が語られているのを見ることができた。そこでは、家族の各人によって、東京大空襲の経験が、テレビ局の取材に見られたような、空襲についてよく分かっているか／いないかという大空襲の当事者—非当事者の二分法に還元することのできない、より緩やかな空襲に対する関わり方（緩やかな当事者性）の中で、その経験を語る立場がつくられていたと言える。ただ、そうした家族の各人によって各々の立場から語られる大空襲の経験は、各々の語りがそれ単独で完結するものでもない。それは、家族の中でお互いに補完するように語られていた。つまり、家族の中で、それぞれの立場から各々の東京大空襲経験が語られるとき、そこでは、家族における大空襲経験の物語と、そうした経験の物語を語る各々の役割が、家族の各人によって意識されていた。そうした家族の各人のライフヒストリーにおける東京大空襲の経験を重ね合わせていくことで、次に、家族における東京大空襲の集会的記憶について見ることができた。

つまり、本章で見てきた家族の各人によって語られる東京大空襲の経験は、一方では、家族の中で共通の語り、共通の意味づけがなされており、それは家族の中で「共通」のものでありながら、その一方では、各々によって、異なる語り、異なる意味づけがなされており、それは各人にとって「固有」なものであり、さらに、そうした家族の各人の「固有」な経験は、それ単独で存在するのではなく、家族における東京大空襲の物語の中に位置づけられている。ここでは、家族の各人と家族という集団との相互作用によって家族における東京大空襲の集会的記憶がつくられていると考えられる。そして、そこで語られる家族における東京大空襲の記憶は、平板的な共通の記憶／イメージとしての集会的記憶ではなく、また、完全な個人的記憶でもない、それは家族の中で、より重層的な集会的記憶／想起のかたちをなしていると考えられる。

（6）東京大空襲の記憶と痕跡

6章では、東京大空襲の痕跡とそれをめぐる活動について取り上げ、東京大空襲の集会的記憶と記憶の継承について検討した。戦時中東京の空襲は下町地域を中心として甚大な被害を及

ぼしたが、現在東京大空襲の被災地域を歩いても、街の中に大空襲の痕跡を見つけることは難しい。東京大空襲の直後その被災地域には大空襲の痕跡が溢れていたが、そのほとんどは、戦後復興とその後の経済成長・都市開発の中で失われていった。そこには、東京大空襲の記憶の「社会的な忘却」を見ることができる。

戦時中東京大空襲は日本の首都を破壊したが、戦後その都市を再建するための開発は大空襲の記憶を社会的に忘却する形式となった。そうした「社会的な忘却」と並行して被災地域には、大空襲の痕跡を保存する「記憶の場」がつくられていった。そのため、東京大空襲の痕跡は、その場所の開発が行われるかどうかと、そのモノの保存が行われるかどうかによって、(1) 取り壊されていくもの(2) その場所で保存されるもの(3) 場所を移されて保存されるもの(4) その場で残っていくもの、の4つの進路を辿ることとなると考えられる。そこには、記憶の分水嶺を見ることができる。そうして東京大空襲の痕跡は、その多くが取り壊されていったため、その場で保存されているものは少なく、一部は民間の資料館である東京大空襲・戦災資料センターの中に集められ保存されていくとともに、橋や公園、寺院・神社などの開発の対象とはならなかった場所においてはその場で残されていった。そしてそれらは、東京大空襲の記憶を想起する枠組みとなっている。

そのため、現在東京大空襲の被災地域には、その場で保存されている大空襲の痕跡は少なく、現在見られるものの多くは、公園や寺院・神社にある戦災樹木や橋にある焼け焦げた跡など、その場で残った痕跡である。それは、開発の対象とはならなかった場所にあったがために、保存という行為を通さなくとも、その場で残ったものである。その一方で、現在東京大空襲の痕跡は、江東区にある東京大空襲・戦災資料センターの中に集められ保存・展示されている。それは、1990年代に東京都によって進められた公的な東京大空襲の資料館を建設する計画が凍結されたのに伴い、2000年代になってから建設された民間の資料館であり、そこでは、東京大空襲の痕跡が歴史展示のなかに位置づけられている。

歴史展示は、「文字」と「モノ」が表す過去と現在の関係性の中で、歴史をつくりあげている。展示の中の「文字」は、「モノ」に関係した過去の歴史が〈かつてあった〉ことを表しており、それは「モノ」を歴史化するものであるが、それに対して、歴史展示の中の「モノ」は、その過去の歴史に関わる「モノ」が〈いまここにある〉ことを意味しており、それは歴史を「現在化」するものである。そのため、歴史博物館の来館者は、そうした歴史が〈かつてあった〉ことと〈いまここにある〉こととの関係性の中で、それはつまり、「モノ」を「歴史化」する方向性と、そうしてつくられた歴史を「現在化」する方向性の中で、その「モノ」に関わる過去の歴史を受けとめることができる。それは、「モノ」を通して過去の出来事を想起することができる記憶の社会的枠組みとなっている。

東京都によって計画された東京大空襲の公的な資料館である東京都平和祈念館は、東京大空襲の痕跡＝「モノ」が集められ保存されることを目的としたものであり、それは東京大空襲の公的な記憶の枠組みを作り出すものであったが、そこでは東京大空襲の痕跡を「歴史化」する枠組みをめぐる論争が起き、その結果として計画は凍結されることとなった。それに伴って設立された民間の資料館である東京大空襲・資料センターの展示の中心となるのは「東京の空襲」の展示であるが、その中には、「熱で溶けたガラス片」や「焼けた貨幣」など東京大空襲の被災地域から集められた大空襲の痕跡が展示されている。しかし、来館者は、ただそれらの「モノ」

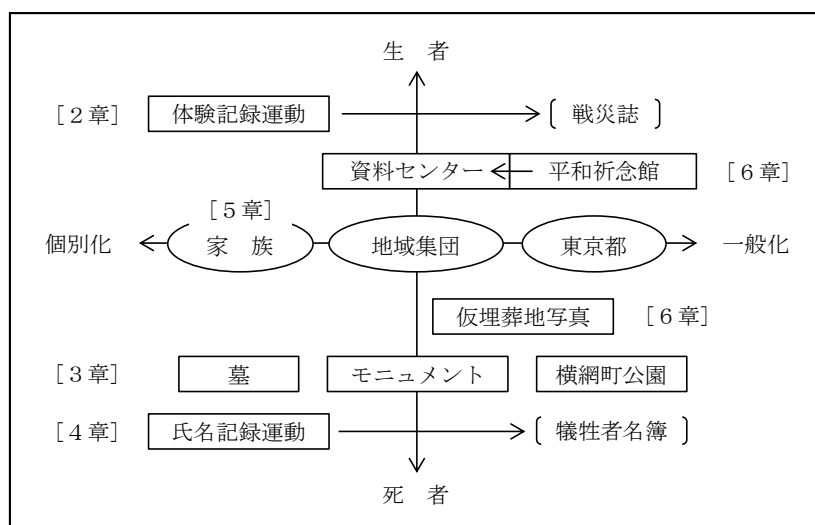
だけを見ても、それを東京大空襲の歴史として受け止めることはできない。そのため、資料館の来館者は、そうした東京大空襲の痕跡＝「モノ」を「歴史化」する方向性と、そうしてつくられた歴史を「現在化」する方向性の中で、大空襲の歴史を受け止めることができると考えられる。ただ、そうして資料センターにおいて東京大空襲の痕跡が集められ、その歴史が示されているが、大空襲の痕跡を失った被災地域ではその歴史が示されることは少ない。

そのような中で、仮埋葬地は、戦時中空襲の死者を一時的に埋葬したにもかかわらず、現在そうしたことを伝える痕跡がほとんど残されていない場所であるが、戦争を経験していない世代の写真家によって、そうした仮埋葬地にある「ふつう」の風景の写真を撮る活動が進められている。その写真展「Requiem 東京大空襲」では、仮埋葬地の詳細な場所である〈ここ〉の〈いま〉を撮る〈いま・ここ〉ということと、そうした仮埋葬地の写真に付けられた埋葬死体数を記した「キャプション」の、二つの「しくみ」によって成立しており、それによって仮埋葬地が「かつてここにあった」ということが表わされている。そしてそれは、写真家が仮埋葬地の近隣住民への取材の中で聞いた、「ここに死体が埋められた」という仮埋葬の目撃者の語りを再現するものとなっている。したがって、この写真展は、そうした写真家という立場から、仮埋葬地における空襲死者の集合的記憶の不在を示す試みとなっている。空襲死者の集合的記憶が表象される「記憶の場」では、空襲の死者を「ふつうではない」ものとして位置づけることで、その死者を想起しようとするが、それに対してこの写真展では、空襲の死者を「ふつう」の生活空間の中に位置づけることで、その死者を想起しようとする。そうした現在の仮埋葬地の写真を撮るという実践は、戦争を経験していない世代の人びとが空襲の死者を想起する、一つのあり方を示唆するものであると考えられる。

4. 結論

戦後日本社会の中で、東京大空襲の集合的記憶は、大空襲の死者と生者をめぐって、大空襲の当事者を中心とした個人と複数の社会的集団の関係の中で成立してきた。そこには大空襲の記憶と向き合う社会の在り方を見ることができる。本論で見てきた東京大空襲の集合的記憶の布置関係を示したものが下の図である。

図 東京大空襲の集合的記憶の布置図



東京の下町地域を焦土と化した東京大空襲は、その地域にあった社会を破壊するものとなったが、そのためそれは、その地域の社会的集団を破壊するものとなり、また、その地域に生きていた人びとの生活を破壊するものとなった。そのため、大空襲の被災者は、焦土の中から自らの生活を再建するとともに社会的集団を再建してきたが、そうした中で被災者は、自らが被災した大空襲について振り返るとともに、あの大空襲とはいかなるものであったのかという問いを追究してきた。そしてその中で被災者は、複数の社会的集団と関わりながら、ある人は大空襲の体験を書き記し、ある人は大空襲の死者を供養し、ある人は大空襲に関する市民運動に参加した。そうした大空襲に関わる社会的な行為を通して、各社会的集団の中では、体験記やモニュメントなど大空襲の集合的記憶を表象するものがつくられ、被災者は、自らが被災した大空襲の集合的記憶を想起してきた。

そうして東京大空襲の記憶と向き合う中で通底しているのは、大空襲が、被災地域に生きていた人びとを生と死とに分けたということであった。とりわけ、生活空間が被災場所となった東京大空襲では、東京の下町地域に住んでいた人びとを生と死とに分けるとともに、その地域に存在した各社会的集団内の人びとを、生と死とに分けた。そうした中で、大空襲の中を生き抜いた人びとと大空襲の中を生き抜くことができなかつた人びととの関係で、「生き残った」という認識が生まれ、それは、大空襲の後を生きる被災者の生活を規定するものとなり、また、大空襲によって破壊された社会的集団を再建していく起点となった。そして、そうした東京大空襲から立ち上がる被災者と社会的集団との関係の中で、大空襲の集合的記憶は成立してきた。

そうした東京大空襲の集合的記憶は、大空襲の被災地域で社会を再建していく被災者の生活の中から立ち上がってきたものであり、それは、大空襲の中の生と死を表象するものであるとともに、被災者自身が大空襲の中で生き残ったことを受け入れるための道具となるものであった。そこには、東京大空襲によって破壊された社会が再建されていく中で大空襲の記憶と向き合う社会がつくられていく過程を見ることができる。そこでは、大空襲によって破壊された被災者の生活と被災地域の社会的集団が再建されていく中で、被災者と複数の社会的集団との相互作用が生まれ、そうした中で、大空襲の記憶がつくられていくとともに、大空襲の記憶と向き合う社会がつくられていった。東京大空襲の集合的記憶は、そうした大空襲の後を生きる人びとの生活の中から生成されてきたものであり、そうした中で、大空襲の記憶と向き合うことは、人びとの生活の一部となっていくと考えられる。